

CA が担当する授業科目における「一般教養」の学習指導について

- 初年次教育・リメディアル(補習)教育、そしてFD(教育向上改善)として -

高等教育が「ユニバーサル化」の段階を迎え、大学が想定した以上に多様な学生が入学してきている。また、入試形態の多様化により、様々な学力レベルの学生が入学している。基礎学力が不足している学生に対して、いかに早い段階で大学における講義等についていける知識や思考力をつけていくかという課題に対する対応の一つとして、以下に東京未来大学(以下本学という)におけるCS(カレッジ&キャリアスキルズ)の実践、特に「一般教養」指導について報告する。

本学では、開学年度の今年度より週に1時限(春学期・秋学期各15時限、年間30時限)CSの時間を設け、CA(キャンパスアドバイザー)がその指導にあっている。この授業は、基本的な知識・技能を習得することが目的であり、その内容は大きく「就職サポート」・「進学サポート」・「資格サポート」・「学習サポート」・「学生生活サポート」に大別される。1年次におけるCS(1時限内)の活動内容としては、伝達事項(学生生活面・教務面)各行事の準備活動や振り返り 諸ガイダンス(履修登録・実習関係等) 一般教養 ビジネスマナー 時事問題の検討 などが挙げられるが、時期によって臨機応変な運用を行った。

上記の一般教養の内容は、春学期は国語として漢字の復習や文章表現に関するものを行い、こども保育専攻では群馬県私立幼稚園連合の共通(就職)筆記試験等を実施するなど若干の試行錯誤を繰り返した。国語表現については、初年次教育・リメディアル教育としてその学習の必要性が認められ、10月25日、及び11月1日に国語表現担当の専任教員における試験的模範授業が行われ、本学の全教職員で見学した。その結果、平成20年度からは、別にCAが担当し単位を認定する「プレゼンテーション」と(前掲の)専任教員が行う「国語表現」とのコラボレーションを前提とした時間割編成にすることとなった。

秋学期以降、CSにおいての「一般教養」の学習内容としては、「一般教養～まかめ種は生えぬ～」のスローガンを冠したプリント学習を実施し、あまり広範囲ではなく的をしぼり、系統的かつ継続的に行った。国語は漢字の読み書きにとどまらず、主に漢字の使い方の判別(同時に意味を知る)を学習し、数学は、一次方程式・連立方程式・虫食い算・年齢算などを学生にまず解かせて、CAが解答を解説した。また、社会の分野として日本地図の白地図を配布し、都道府県名を記入させた(グループワーク形態)。

クラス単位の程よい人数(35名ほど)環境で、各個人に程よい緊張感を持たせつつも、グループによる話し合いやグループ同士の競争心も取り入れた楽しい雰囲気の中、問題の解ける学生と理解が不十分な学生が、お互いを認め合いながら切磋琢磨し、「理解」していく過程は、まさに集団援助技術によるグループダイナミクスの作用であり、個々の不十分な部分を確認して補習し、今後の学習活動に向けての意欲を育てる良い機会であると感じる。これは大学における初年次活動・リメディアル教育の一端に当たり、この教育活動は、FD活動の一部として大変有効な機会になったと思う。